

## 昭和からの伝言 (1)

―令和：最初の「終戦記念日」に思う―

土田 良吉

(一) 全国戦没者追悼式のこと

終戦から74年経った8月15日、11時55分から政府主催の全国戦没者追悼式が東京都千代田区の日本武道館で行なわれた。令和に遷って初めての終戦記念日を迎へ、310万人に上る戦没者を悼む此の式典は今年で五十七回目になる。全国の戦没者遺族や各界の代表者ら6497人が参列し、式典では、正午に合わせ参列者全員で黙祷をささげた。宮内庁によると、上皇ご夫妻と天皇皇后両陛下の長女愛子さまは夫々お住まいで黙祷された。(読売新聞8月16日の朝刊より)

当日NHKテレビは、11時50分から式典の模様を生中継した。放送の全容と諸説を交え記録しました。

『只今から、全国戦没者追悼式が始まります。ご起立願います。天皇皇后両陛下が入場されます。先導役は根本厚生労働大臣です。天皇皇后両陛下には、上皇ご夫妻が天皇皇后として担われていた公務を、原則、すべてを受け継がれました。令和となつて最初の全国戦

没者追悼式であり陛下にとつては初めての出席となります。国歌斉唱、一節の前奏ののち、ご唱和をねがいます。・・・。

安倍晋三総理大臣の式辞です。

「天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、戦没者のご遺族、各界代表、多数のご臨席を得て全国戦没者追悼式をここに挙行いたします。先の大戦では310万余の同胞の命が失われました。祖国の行く末を案じ、戦陣に散つた方々、終戦後、遠い異郷の地にあつて亡くなられた方々、広島や長崎での原爆投下。東京をはじめ、各都市での爆撃、沖繩における地上戦などで、無惨にも犠牲となつた方々、今、すべてのみ霊の御前にて安かれと心よりお祈り申し上げます。今、私たちが享受している平和と繁栄は、戦没者の皆さまの尊い犠牲の上に築かれたものであることを、私たちは決して忘れることはありません。改めて衷心より敬意と感謝の念を捧げます。いまだ帰還を果たされていない多くのご遺骨のことも決して忘れません。ご遺骨が一日も早くふるさとに戻られるよう、私たちの使命として、全力を尽くして参ります。わが国は戦後一貫して平和を重んじる国として、ただひたすらに歩んでまいりました。歴史の教訓を深く胸に刻み、世界の平和と、繁栄に力を尽

くしてまいりました。戦争の惨禍を二度と繰り返さない、この誓いは、変わる事はありません。昭和、平成そして令和の時代においても決して変わることはありません。平和で希望に満ちあふれる新たな時代を創り上げてゆくため、全力で取り組んでまいります。世界が直面しているさまざまな課題の解決に向け、国際社会と力を合わせて、国の未来を切り開いてまいります。終わりに、今一度、戦没者のみ霊に平安を、ご遺族の皆様にはご多幸を心よりお祈りし、式辞といたします。

令和元年八月十五日 内閣総理大臣 安倍晋三

首相は「戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この誓いは、令和の時代においても決して変わることはない。今を生きる世代、明日を生きる世代のために、国の未来を切りひらいてまいります」と力づよく述べました。会場の皆さまご起立ねがいます。天皇皇后両陛下が標柱の前にすすまれます。1分20秒後の正午十二時、時報を合図に戦没者に対し一分間の黙祷を捧げます。只今、全国戦没者追悼式の模様を中継でお送りしてまいります。〳〳〳黙祷を終わります。

天皇陛下からお言葉を賜ります。

「本日、戦没者を追悼し平和を祈念する日に当たり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦で、かけがいの

ない命を失った数々の人々と遺族を思い、深い悲しみを新に致します。終戦以来七十四年、人々のたゆみない努力により今日の平和と繁栄が築き上げられました。が、多くの苦難に満ちた国民の苦難を思うとき誠に感慨深いものがあります。戦後の長きにわたる平和な歳月に思いをいたしつつ、ここに過去を顧み、深い反省の上に立って再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願ひ、戦陣に散り、戦禍に倒れた人々にたいし、全国民と共に心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります」と、述べられました。

側近によると、陛下は、お言葉の推敲を重ね、戦争の時代を生きた上皇様とは違う戦後世代にあつた自らの言葉を考え出されたという。陛下は幼少期から折に触れ、昭和天皇や上皇さまから戦争の話をお聞かされていた。宮内庁幹部は「上皇さまを一番の師として戦争の歴史を学ばれ、平和を願う思いは陛下のお身体に染みついていて」と語っている。

元宮内庁長官の羽田信吾氏は、「象徴である陛下がお言葉を通じて、戦争の記憶を風化させてはならないと、国民と共に確認されたことは重いものがある」と語った。

陛下の注目されたお言葉は、上皇さまの内容をほぼ

踏襲しつつ、所々で戦後生まれの天皇にふさわしい表現に変え、親の世代から戦争の記憶をしつかり継承する覚悟をしめされた。このあと、衆議院議長、最高裁長官、遺族代表から

の追悼の言葉に続いてゆく。・・・中継おわる。

参議院議長の追悼の辞(要旨)

「今年もまた、8月15日を迎えました。日本中が時空を超え、まるで時が止まったかのような、ピンと張り詰めた空気に包まれる特別な日です。戦後の焦土の中から必死で立ち上がり、並々ならぬ努力の上に、現在の平和な世の中を築き上げた歴史を持つ私たちは、次の世代には、あの悲惨な戦争の記憶と平和の尊さを語り継ぎ、国際社会には、武力による衝突が如何に愚かな行為であるかを強く訴えてゆく責務があります。

憲法が謳う(うたう)「平和」への思いを胸に刻み、人類の未来が平和で希望に触れた物になるように全力を傾けて参りますことを固くお誓い申し上げます」と、決意を読み上げました。

名古屋大准教授の河西秀哉氏(日本近現代史の話として

「天皇のお言葉の『人々のたゆみない努力』という部分は、平成時代の『国民』から『人々』に変わった。

戦後の平和は日本人だけではなく。各国も含めた人々の努力の成果と言う思いがにじんであり、海外留学を経験し、国際的な視野を持つ陛下ならではの表現だろう」と述べている。また

放送大学教授原武史氏(日本政治思想史)の話として「平成の時と比べて、お言葉がほとんど変わっておらず、令和も平成流を踏襲する姿勢を示されたといえる。平成時代は天皇自身の考えを織り交ぜていたとみられるが、今回は即位したばかりで、『令和色』を出すには未だ暫く時間がかかるのではないかと。(何れも読売新聞より)

この日、日本経済新聞は、ホームページの電子版に【令和に持ち越された戦没者追悼のあり方】を載せた。「先の大戦が終って七十四年経った。戦禍を被った内外の無垢(むく)の人々を悼み、平和への誓いを新にしたい。高齢者社会とは言え、日本の総人口に占める戦前・戦中生まれ割合は16%に減った。焦土の記憶が薄れ、日本人が思い描く平和へのイメージは少しずつ変わってきた。私達はこの先、戦争と平和にどう向き合えばよいだろうか。平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して:」令和最初の全国戦没者追悼式には約5300人余の遺族が集まり、子どもたちのた

めに平和な時代をと、遺族は不戦の思いを次の世代に伝えていく事を改めて誓った」と、述べた。

式にまねかれた遺族5、391人のうち、1989年（平成元年）に3269人に上った妻の数は、今年（平成元年）に5人に止まり過去最小となった。子は2751人、孫は451人、ひ孫は140人だった。参列者の年齢別では、八十才以上が1666人で全体の21・6%に上った。一方、戦後生まれは戦後過去最多の1650人で全体の30・6%を占め、初めて3割を超えた。最年長は。夫を沖繩の戦場で亡くした大正10年、沖繩生まれの内田シマさん（97才）。最年少は14歳。宮崎県遺族代表団53名は搭乗予定だった航空機が台風10号影響で欠航となったため参列できなかった。

ここで、終戦当時からのアジア諸国の反応に触れてみたい（ホームページで捉えた）。戦前のアジアの地図を見ると中国は内戦状態の最中であり、フィリピンはマッカーサー家の影響力が強く、真の独立国は日本とタイだけで後は白人国家の植民地だった。それが戦後すべて独立国家となって次のような論考にいたった。

ジャワハルラール・ネルー（インド独立後の初首相）は語る。「インドは程なく独立する。その契機を与えて

くれたのは日本である。日本のお蔭でインドの独立は三十年早まった。この恩は忘れてはならない。これはインドだけではない。インドネシア、ベトナムをはじめ東南アジア諸民族すべて共通である。インド国民は、日本の国民の復興にあらゆる協力を惜しまないであろう。他の東亜諸民族も同様である」と。（名言集・戦後、日本に贈られた言葉たち）より

ラダ・ビノード・パール（インド法学博士、極東国際軍事裁判判事）は、「要するに、彼ら（欧米諸国）は日本が侵略戦争を行ったと言うことを歴史に留めることによって自分らのアジア侵略の正当性を誇示すると同時に、日本の17年間（昭和3〜20年、東京裁判の審議期間）の一切を罪悪と烙印する事が目的であつたに違いない。

わたしは、1928年から1945年までの17年間の歴史を2年7ヶ月かけて調べた。この中には、おそらく日本人が知らなかった問題もある。それを私は判決文の中に綴った。その私の歴史を詠めば、欧米こそ憎むべきアジア侵略の張本人であるということがわかるはずである。それなのに、あなた方は自分らの子弟に「日本は犯罪を犯したのだ」、「日本は侵略の暴挙を取ってしまったのだ」を教えている。

満州事変から大東亜戦争にいたる真実の歴史を、どうか私の判決文を通じて十分に研究していただきたい。あやまられた彼らの宣伝の欺瞞を払拭せよ、日本の子供が歪められた罪悪感を背負って卑屈、退廃に流れてゆくのを私は平然として見過ごすわけにはゆかない。あやまった歴史は、書き換えられなければならない。」

(昭和27年11月5日、広島高等裁判所での講演から)

ガザリー・シャフエー(マレーシア、元外相)は、

談話の中で、日本の某代議士の「過ぐる大戦において、我が国は貴国に対しご迷惑をおかけして申し訳有りませんでした」という挨拶に対して「どうして、そういう挨拶をなさるのですか。あの大戦で日本はよくやっただけではありませんか。マレー人と同じ小さな身体の日本人が、大きな体のイギリス人を追い払ったのです。その結果マレーシアは独立できたのです。大東亜戦争なくしてはマレーシア人もシンガポールも、その他の東南アジア諸国の独立も考えられないです」と語った。ラグ・クリシュナン(インド大統領)は、昭和44年日本経済新聞で「インドは当時、イギリスの不沈戦艦を沈める等ということは想像もできませんでした。われわれと同じ東洋人の日本が見事に撃沈した。驚きもしたが、この快挙によって東洋人でもやれるという気

持ちが起きた」と述べている。

また、ビルマのバー・モウ元首相は独立宣言の中で、「約50年前、ビルマは3回にわたる対英戦争の結果、その独立を失へり。英国側はアジアに対する掠奪的野望を以って、これ等の戦争を遂行せり。英国はさらに、その伝統的陰謀・賄賂および想像し得るあらゆる詐欺及び術策の武器を使用せり。ビルマ人は徐々に搾取され、時の進むに従い総ての国民的実質、莫大なる物質的資源、機会、文化、言語、さらに遂にはその生活様式までも失い、愛国者は挺身的精神を以って、鎮圧、入獄、流謫、拷問及びしばしば、死そのものを甘受して突進してきたれり。これらの英雄はビルマの生存のため苦難を受け、遂には斃れたり。ビルマ人はアジアを結合せしめ、アジアを救う指導者を待望しつつありしが、遂に之を大日本帝国に発見せり。ビルマ人は、このビルマに対する最大の貢献に対する日本への感謝を永久に記録せん事を希望するものなり」と結んだ。

タイ国元首相のククリックドは、

「日本のお蔭でアジアの諸国はすべて独立した。日本と言うお母さんは難産して身体をそこなつたが、産まれた子供達はすくすくと育っている。今日、東南アジアの諸国民が米英と対等に話が出るのは、一体、誰

のお蔭であるのか。それは身を殺して仁をなした日本と言うお母があつたからである。12月8日は、我々はこの重大な思想を示してくれたお母さんが重大決意をされた日である。我々はこの日を忘れてはならない」(12月8日現地「サムアム・ラット紙」に於いて)

これらを顧るとき、大東亜共栄圏の思想が高まつていた時代を思い出す。わが国が、戦争と言う惨劇に耐え、廢墟から立ち上がつて目ざましい復興を成し遂げ、今や、世界平和の盟主として讃えられていることを思うと、無念の最後を遂げたみ霊こそ、国の支えであり、決して、その死を無にしてはならないと、信ずる。

靖国神社では、ご創立百五十年を迎えるに当たり、「英霊よ、ありがとうと言えることが崇敬協賛の目標」と力説しています。

## (二) 回想―終戦―

昭和20年8月15日(終戦の日)、自分は二十才、旧陸軍航空師団の一兵卒で、幹部候補生の教育隊にいた。8月15日12時、天皇のお言葉が放送されるとあつて、練兵場に約二千名が整列した。「お言葉の放送を速記せよ」との指示で、同僚3名と白布の机で、ペンを握つたが、聞ききれないお言葉が難しく、筆が止まつたまま

放送は終わってしまった。隊長は「戦争は負けだ…。動揺するな」と、言つて悄然と去つて行つた。

緊張がほぐれ、解放感と同時に無念の虚脱に包まれた。通信隊が次々と東京のニュースを傍受し、軍高官の自決・決戦派の挙動など、ただならぬ事態が耳に入るや「流言飛語に惑わされるな」と、伝令が走つた。翌日、身の回り品以外の全てを焼却せよとの特命で、記録書類はもとより貴重な日記や写真まで全て煙にした。班長が「俺たちは分かれぬが、お前たちは皆、故郷へ帰れるぞ」と、宥めてくれた。早くも18日我々は、第一次復員で鈴鹿市加佐登駅から列車に乗つたが、哀れにも、樺太・千島に展開していた将兵はシベリア抑留となり、同期兵や多くの先輩が、むごい捕虜の日々を過ごすことになった。名古屋駅で東海道本線に乗り換えようとしていたとき、大混乱の客車のうち空いている数両を見つけて近寄つたところ海軍専用だった。下士官が近づいてきて大声で怒鳴られた。「貴様ら陸軍は弛んでいる。我々は之から戦うんだ」と息巻いた。武装解除が終わっているのに如何したことかと訝りながらその場を去つたが、青森港から輸送船で函館に向かつたときも、同じような状況に出会つた。運よく輸送船に乗れたものの、乗員は統制の取れた900名ほ

どの陸軍の部隊であった。有りたいたい事に、中隊長が同郷人で便宜を図ってくれて乗船できたのだが、どう見ても復員兵の格好ではなかった。あとになって分かったのだが、8月下旬、ソ連軍の挙動が怪しく旭川七師団では迎撃の構えだったと言う。ソ連軍が本道上陸の命令を今や遅しと待機中だったという。北海道危しかったのだ。輸送船の部隊は迎撃要員だったのでは？ トルーマン大統領の一声でスターリンの北海道侵攻の野望は消えたが、終戦直後の混乱は想像をこえていた。

すでに8月21日、函館駅構内のスピーカーが響いた。「第一気象連隊東海第555部隊の復員兵は、ただちに原隊に戻って下さい」と、我々のことである。連絡船は総て撃沈され、同郷の5名は離れずに漸く青函海峡を渡れたのに、今更戻ることなどんでもない、それに東海道本線の海軍のことといい、今まで同じ船に居た陸軍部隊のことが頭を掠め、この放送は聴かぬことに決め根室行き列車に乗り込んだ。あとで聞くところによると、食糧、被服など本隊の備蓄が余りすぎで追加支給するためだったという。近郷の連中にとっでは好運だったろうが、3日もかけて北海道に辿り着いた我々には無縁だったのである。

思えば、1945年8月15日の終戦の日こそ、「日

本が一番長い日」であった。灯火管制は解かれ明るくなり、空襲の爆音がピタリと消えたが、国中が静寂な焼け野が原、呆然自失していた。戦争の体験は百人百様だが、「武士道とは死ぬことと見つけたり」を美德と信じ、勝利に向って死をも恐れない純粹さで戦い抜いた、あの凄まじい闘魂を思うと遣りきれぬ思いが募る。

9月3日、米戦艦ミズーリ艦上で降伏文書に調印。

間髪をいれずマッカーサーの占領政策が始まった。

当時、親日家のアメリカ人のロバート・シャーロットは、その著書「太平洋戦争」の中で次のように述べた。

「今こそ、日本人は、ただ、彼ら自身の実力と熟練と、旺盛な精力のみを以って、それに彼らの旧敵国より差し伸べられる援助の手をかりて、その祖国を再建せねばならないのである」と、全く無力そのものになった敗者に対する憐憫と激励なのか、それとも人道的な労わりを述べている。さらにロバートは「神風特攻隊は米兵を最も恐れさせた。こんな命知らずの敵と戦うのはもう凝り懲りである。米国民が厭戦気分になるのを恐れて数ヶ月間、国内の新聞報道をさし止めていた程である。勇敢な戦死を遂げた日本軍将兵の崇高な精神に対して、世界中は賛辞を惜しまなかった。「将来にわ

たつて日本民族を高く評価し続けるだろう」と。

日米講和条約のあと当時の吉田茂首相は「戦争では負けたが、外交では勝った」と胸を張った。それこそ、名実ともに旺盛な精力を以って戦後の大復興を成し遂げた日本人の根性は、特攻精神の発露そのものだったのかも知れない。日本の戦後復興は世界の七不思議とも言われて平成の時代に遷った。これらの一貫した史実の体験者は我々の年代(最後の徴兵組)で終わるが、一方で、真実を引き継ぎ、後世に残そうとする若いグループが増えていることは頼もしい。

これとは別に、ハルミトン・フィッシュ氏(共和党上院議員)は、勝者アメリカによる戦後の「本音」として、中立的アメリカが戦争に参加しなかった理由に、「ルーズベルトが過去6年間の失政(「ニュー・ディール政策」つまり戦争経済による雇用の拡大政策)を糊塗したい、戦争指導者としての歴史に名を残したいと言う自己顕示欲を満たすため、大統領自身が国際連合を組織して、ソ連のスターリンと共にその支配者になるためであった」と、述べている。

日本人が知らない「太平洋戦争の大嘘」(国際政治学者・藤井厳喜の講演録)の中から・「1946(昭和21

年5月3日、東京で元アメリカ大統領ハーバート・フーバーと連合軍最高司令官マッカーサーは『太平洋戦争とは、一体何だったのか』を3日間にわたって話し合った。そのとき、日本人なら誰も思いもしないような事をフーバーは口にした：「太平洋戦争は、日本が始めた戦争ではない。あのアメリカの『狂人・ルーズベルト』が日米戦争を起こさせた。気が狂っていると言っても精神異常なんかじゃない、本当に戦争をやりたいくたしようがなかった：その欲望の結果が日米戦争になったんだ」と、言う、その言葉を聴いてマッカーサーは、はつきりと同意した。

戦争を知らない日本人は小さい頃から「日本が真珠湾を、宣戦布告も無しに攻めて戦争を起した」「日本は悪い国だ」ということを新聞でもテレビでも繰り返して教わってきた。我々が耳にした太平洋戦争の常識とは真逆とも言える証言が47年もの間、公開を禁じられていたフーバー元大統領の回顧から真相が次々と浮び上がった。ハルノート、原爆投下、終戦：アメリカではこの証言を元に歴史の見方が少しずつ変わり始めているのに日本のメディアは一向に、この事実を取り上げてはいない」と記している。思うに近代の二度にわたる大戦は、一握りの首脳による陰謀・術策で起きた。



愚かにも日本は、この『畏』に嵌っていたのかも！  
正しい歴史感を鍛え、冷静に世相の激流に耐えよう。  
ラダ・ビノード・パール（インド、軍事裁判判事）の  
言葉をかりるまでもなく、子供達が歪められた罪悪  
感を背負って、卑屈、退廃に流れてゆくのを、平然  
として見過ごす訳にはゆかない！！ 以上

——参考までに——

国際政治学者・藤井嚴喜氏の講演録について

『日本人が知らない太平洋戦争の大嘘』の目次から

はじめに……1ページ

・反日プロパガンダは、日本の国そのものに対する攻撃で  
ある

・「反日中毒が蔓延している」と反骨のフランス人ジャーナ  
リストが喝破した

・序章フーヴァー大統領の『フリーダム・ビトレイド』が明  
らかにしたルーズベルトの裏切り

・フーヴァーの勇気ある告発——ルーズベルトは誰のた  
めに戦争を始めたのか

・ルーズベルト神話は、いまだアメリカ社会に根強く生き  
ている

第1章・両国は衝突する運命だったのか？ ……22ページ

・日本の鎖国を終わらせたのはアメリカだった

・ハワイ王国を乗っ取ったアメリカ

・若き東郷平八郎は、ハワイの亡国とどう向き合ったか

・英露ふたつの大国がぶつかったのが、日本だった

・アメリカが、日本を仮想敵国とした戦争計画「オレン  
ジ・プラン」を作っていた理由

・対日感情を大きく変えた移民排斥運動

・日米は、どこかの段階でぶつからざるを得ない運命に  
あった

・南北戦争勃発で生じた日米関係の空白

・カラカウア王が日本に持ち掛けた仰天計画

・ロシアとイギリスのグレート・ゲーム

・アメリカはなぜ、日英の蜜月関係を終わらせたかった  
のか

・日米関係はずっと悪くなかった

・日本人にとつて衝撃的な出来事だった、排日移民法の  
成立

・アメリカは、日本がチャイナの利権を独占するのが許せ  
なかった

## 第2章 日米戦争を起こしたのは誰か？

### 『フリーダム・ビトレイド』でフーヴァーは何を伝え

#### たかつたのか：58ページ

- ・日本に対する宣戦布告なき戦争が始まっていた
- ・スターリン、チャーチル、フーヴァーには、ルーズベルトとの深い関係があった
- ・ルーズベルト家は、チャイナ貿易で財を成した家系だった
- ・かくして、アメリカは開戦に踏み切った
- ・「戦争を始めたいという狂人の欲望」が日米戦争を引き起こした
- ・日本の知らない裏側で世界はつながっていた
- ・なぜ、海軍は三国同盟を防げなかったのか
- ・ついに一緒の船に乗った！ 安堵して眠りについたチャーチル
- ・アメリカを侵略する共産主義の脅威
- ・「赤狩り」という極端な政策がアメリカで吹き荒れた理由
- ・アメリカ国民よ、今こそ目を覚ませ
- ・フーヴァーは、アメリカンドリームボーイだった
- ・歴史から消し去られたフーヴァーの功績

・世界経済を立て直すための経済サミットを、ルーズベルトが潰してしまった

・ルーズベルトのニューディール政策は、大不況を克服することができたのか

・なぜ、ルーズベルト大統領は戦争を望んだのか

・チャイナとキリスト教宣教師の奇妙な関係

・ヨーロッパの戦争でアメリカン・ボーイズを死なせるな

・フーヴァーとマッカーサーの会談で何が話されたのか

・最大限譲歩した和平交渉は、拒絶された

・三国同盟締結は、日本を滅ぼす道だった

・日本はハワイではなく、極東ソ連を攻撃して挟み撃ちにするべきだった

・フーヴァーは、共産主義の脅威と戦うことに生涯をかけていた

・アメリカ国民は本当の歴史を知らされていない

・チャイナは、あらゆるものが戦争の手段となる「超限戦」を仕掛けている

・フーヴァー大統領への期待と失望

・世界経済を立て直すための経済サミットをルーズベルトが潰してしまった議会にアメリカの宣戦

・布告を求めたルーズベルトの欺瞞

・フーヴァー研究所を創設して、アメリカの保守主義を支える

### 第3章 原爆を落とす必要があったのか？

日本は終戦のために水面下で動いていた…128

・無条件降伏の要求が、戦争を無駄に長引かせ、より残酷なものにした

・広島・長崎への原爆投下がなくても、日本は降伏していた

・日本に無条件降伏を吞ませるための切り札  
・徹底抗戦を叫ぶ陸軍統制派は、社会主義革命を望んでいた

・イギリスは、伝統的な外交政策、バランス・オブ・パワーに徹すべきだった

・第二次世界大戦は、世界の構図をどう変えたか

・第二次世界大戦の本当の勝者は誰か

・チャイナを勞せずして得た毛沢東

・ルーズベルト大統領3つの大罪

・原爆投下は、新世界におけるアメリカの覇権を誇示するものだった

・トルーマンが、ソ連対日参戦の前に戦争を終わらせたかった理由

・和平を訴える「近衛上奏文」もう一つの危機感

・日本は、大局観に基づく知恵を持っていたか

・余りに大きかったイギリスの勝利の代償

・最大の犠牲者を出したソ連が、第二次世界大戦で得た最大の成果

終章 日米がもし戦わなかったら？

世界地図は全く異なるものになっていた…160

ページ

・日本はイギリスとの戦いだけなら勝機があった

・大英帝国の運命を握っていたのは、ドイツではなく日本だった

・ヨーロッパは、ナチス・ドイツとソ連の支配が温存された  
・チャイナは分断国家となっていた

終わりに

ヤルタ協定を徹底批判したブッシュ・ジュニアの

演説…168ページ